

## 中央線の思い出

〜 森崎くんと八王子へ



入来院 重宏

(東京の) 中央線と言えば、子供時代からずっとオレンジ一色の車両と決まっていた。

コスト削減で車両全部オレンジ一色塗装から一部のみオレンジ塗装に変更してから、もう12年くらいになるけれど、いまだに中央線と言えばオレンジ一色の車両が僕にとっての中央線。オレンジ一色の車両でなくなるのであれば、いっそのこと「中央線」という名前も変えて欲しかったくらいだ。

オレンジの車両が見られなくなつて本当に寂しい。

森崎くんと八王子へ

この話は、僕が小学校の3年生の秋のこと。年齢9歳、昭和45年(1970年)大阪万博の年だから、今から半世紀近くも前のことだ。当時僕は東京都の西部の日野市に住んでいた。「日野市豊田866」簡単な住所だから今でも憶えている。

さて、ある秋の日の学校の帰り道、僕は同級生の森崎くんに「遠くに行かないか」と冒険話をもちかけられた。

「いいよ。どこに行こうか」

「八王子」と森崎くん

「・・・」

僕は森崎くんの返事に驚いて声が出なかった。八王子市は日野市の西隣に位置する、僕にとってはまるで「夕日が沈んでいく遠くの国」だった。

「八王子に行ってみよう」森崎くんは僕の

目を見つめて言った。

「どうやって行くの」

「電車で」

森崎くんは、学校帰りに電車に乗って隣町に遊びに行こうなんて、あまりに非常識なことを平然と言つてのけた。

「お金がないよ」と僕

「俺が持つてる」

家族とだつて減多に乗らない電車に森崎くんと二人で乗つて、知らない土地に遊びに行くなつて、とても恐ろしく思えたけど、行けない理由もなかったし、それより何より、なんだか森崎くんに「お前にその勇気があるか」と試されているような気がして、僕は八王子に行く決心をした。

当時、国鉄の小学生の初乗り料金は、確か5円だった。森崎くんは往復の運賃とプラス小遣いとして僕に40円くれた。昭和45年

のある秋の日の多分午後3時頃、中央線豊田駅から身長125センチ足らずの子ども二人が八王子に向かって旅立ったのだつた。

八王子駅は、豊田駅の隣駅だけど結構距離はある。僕は大きな不安と小さな期待で窓の外の景色を見ていた。森崎くんもちよつぱり後悔しているようだった。

生まれて初めて八王子駅を降りた。森崎くんも多分初めてだったと思う。わが町わが駅豊田駅とのあまりの違いに二人とも息を呑んだ。八王子駅は巨大な駅だった。改札を出てさらに驚いた。自分の住んでいる町の隣にこんな大都市があるなんて夢にも思わなかった。振り返れば、そこにいつも八王子駅が見える距離の範囲内で森崎くんと僕は隣町を見学した。

お好み●●20円より

いつもはとっくにおやつを食べ終えている時間で、二人ともお腹がとつても空いている。そこに、まるでタイミングよく目の前に

「お好み〇〇20円より」の看板が現れた。

「なんて書いてあるんだろう」と森崎くん。

僕は、まだ習っていない「お好み」を「このみ」とすっかりと読むことができた。●

●は読めなかったけど、「お好み」だから、当然「あれか」とピーンときた。

「お好み焼きだよ」

「お好み焼きが20えんっ！お腹空いたから食べようか」

森崎くんは安さに驚いて即提案してきた。

「うん、20円なら帰りの電車賃も残るから食べよう」

森崎くんと二人で店の引き戸に手をかけて「せーの」で思い切り開けた。おじさんが3人、おばさんが2人いて、一斉にこつちを

向いた。

「お好み焼きください」僕ら二人は元気よく大きな声で叫んだ。

一瞬の間をおいて、まるでお店が壊れるんじゃないかと思われるくらいの大爆笑が起きた。お店はまだ準備中だったようで、お腹を抱えて大笑いしている5人の大人はみんなお店の人だった。

「坊やたち、こつちへおいで」カウンターの中のおじさんが笑顔で僕らを呼んだ。

森崎くんと僕は店内をきよろきよろ見て、はじめてそこがお寿司屋さんであることを理解した。時すでに遅し。おばさんたちが寄ってきて僕らの手を引っ張ってカウンターまで連れてきた。カウンター席にちよこんと座らされた僕らは大人たちに取り囲まれて「どこから来たの」などと質問攻めにあつた。何か聞かれて、僕らが何か答えるたびにおじさん

おばさんは大笑いをして喜んだ。僕は『この人たちは子どもと話をしたことがないのだからか』と不思議な気持ちになった。

「お好み焼きは無理だけどね」と言つて、カウンターの中间のおじさんが僕ら二人に鮪をひとつづつ握つてくれた。それはそれはきれいな赤身の鮪だった。当時、お寿司なんて滅多に口にするとはなかったし、僕はお寿司屋さんでお寿司を食べることもなかったから、職人さんが握り寿司を握る姿を見るのは初めてのことだった。笑顔の大人たちに囲まれて、なんだかとても照れくさくて恥ずかしかつたけれど、真つ赤な鮪の握り寿司はとっても美味しかった。

「それじゃあ20円づつね」鮪の握り寿司は20円じゃなかったはずだけど、今思うとなにしる粋な寿司屋だった。お店の大人5人全員が店の外まで僕ら二人を見送つてくれた。

「気をつけて帰るんだよ」

「今度はお父さん連れてくるんだよ」

握り寿司ひとつだったからお腹一杯にはならなかつたけど、なんだか気持ちよくて胸が一杯になった。僕の記憶はそこでふつり終わっている。

考えてみたらあんないい旅は、あれ以来なかつたかもしれない。

お寿司屋さんのカウンターでほんとの「お好み」を握ってもらつたのも実にあれから20年くらい後だった。

(キリン社会保険労務士事務所代表)

